

《授業と子ども》

ひらがなの授業(12)

—カタカナもかな文字のなかま(2)—

千葉 建夫

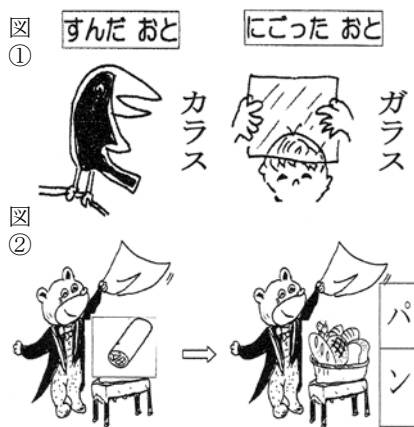
ひらがな表記の原則をつかって

清音のカナカタ文字をしっかりと覚えてしまえば、他の音節のカタカタ文字の表記は、ひらがなで学んだ原則がそのまま応用できる。指導の順序としては、清音、濁音、促音、拗音、長音、拗長音の順番でとりあげ、これまで学んできたひらがな表記の原則を確かめながら学習を進めた。清音のカタカナ指導の段階で、子どもたちと集めた外来語は、絵カードにし、指導の順序にそって整理しておき、それぞれの授業で活用していった。



—
ひらがなのにごった音(濁音)の授業では、すんだ音(清音)にごった音との対立を意識させながら進めたが、そのとき使用した「からす」と「がらす」、「はん」と「ぱん」

にごった音はにごり点をつけて



にんじやが、なげた小石で、へんしんするんでしよう」
子どもたちはひらがなの「変身遊び」をよく覚えてくれていた。(図①)

「こぐまの手品師が『ハン』にピンポンを落として変身させました。何になりますか？」
「おいしい、おいしい『ぱん』になります。」(図②)

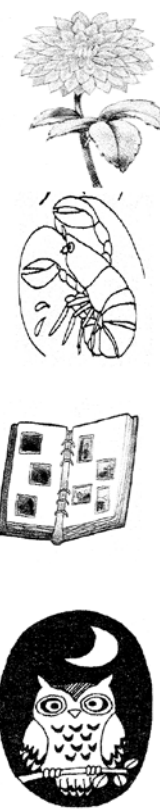
「そうだったね。すんだ音にごった音にするときには、すんだ音のひらがなに「ゝ」や「。」「を」をつけてあらわしました。カタカナのときも同じように「ゝ」

の絵カードをそのまま使って、最初はひらがなの「からす」をカタカナ文字の「カラス」に置き換えた。
「『か』のにごった音、『ガ』はどう書きましたか？」
「『か』にテンテンだよ。」

パ	バ	ハ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ
ピ	ビ	ヒ	ヂ	チ	ジ	シ	ギ	キ
プ	ブ	フ	ズ	ツ	ズ	ス	グ	ク
ペ	ベ	ヘ	デ	テ	ゼ	セ	ゲ	ケ
ポ	ボ	ホ	ド	ト	ゾ	ソ	ゴ	コ

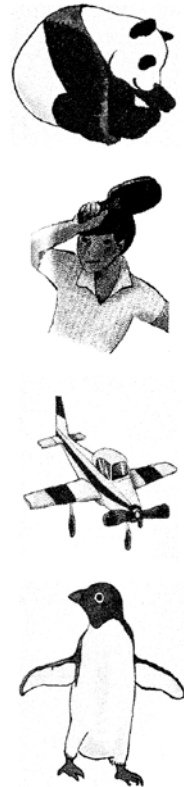
や「。」をつけます。「」や「。」のことをにがり点とい
ます」と説明をして、すんだ音とにごった音の対照表を作
成した。(図③) それから、絵カードを使ってにごった音
の入った単語をカナカナで書く練習をした。(図④)

ダ
リ
ア
ザ
リ
ガ
ニ
ア
ル
バ
ム
ミ
ミ
ズ
ク



図④

パ
ン
ダ
ピ
ン
ポ
ン
プ
ロ
ペ
ラ
ペ
ン
ギ
ン



エ
プ
ロ
ン
つ
け
て
パ
ン
ぶ
く
り
ズ
ボ
ン
に
ブ
ラ
シ
を
か
け
ま
し
よ
う
ピ
ア
ノ
の
お
と
が
ポ
ロ
ン
ポ
ロ
ン
ペ
ン
ギ
ン、
パ
ン
ダ
に
ゴ
リ
ラ
ド
ア
を
た
た
い
て
ボ
ク
シ
ン
グ
ピ
ン
ポ
ン、
ピ
ン
ポ
ン、
バ
ト
ミ
ン
ト
ン

図⑤

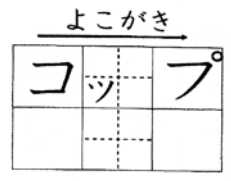
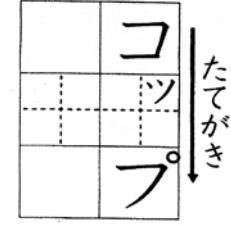
カタカナで書
く単語を組み合
わせ、語呂のい
いことば遊びも
考えた。(図⑤)

昔の人は文字
の生まれる前の
時代でも、長い

お話を口伝えで伝承してきた。きっと、言葉の調子がおぼ
えやすいように工夫されていたからだろう。語呂遊びには
そんな昔の知恵が生きている。子どもたちは、できあがっ
た短文を調子よく歌いながらノートに書き写した。

つまる音とねじれた音もひらがなと同じに

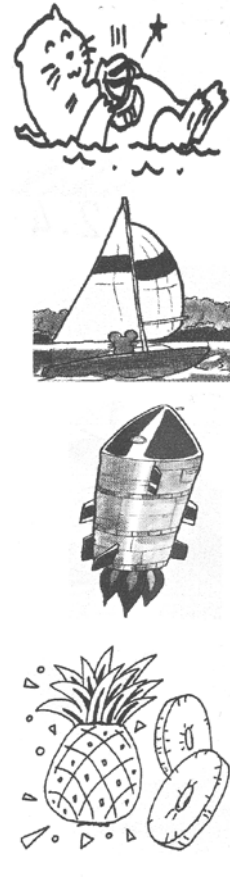
つまる音(促音)の表記も、ひらがな文字をそのままカ
タカナに置き換え
ればよい。音節と
ひらがな文字の関
係を復習し、縦書
きと横書きの表記
のしかたを練習し
た。(図⑥)



図⑥

それから濁音と同じように絵カード(図⑦)をつかって、
単語の表記の練習をしたあとは、見つけた単語をつかって


ラ
ッ
コ
ヨ
ッ
ト
ロ
ケ
ッ
ト
パ
イ
ナ
ッ
プ
ル



図⑦

⑧
 きようは みんなで ピクニック
 バスケットに いっぱい、ごちそうをいれて
 ビスケット、コロッケ、パイナップル、
 アップルパイ、ホットドック
 いっぱい たべた
 みんなで たべた

⑨



		ジ	
		ヤ	
			ム

たてがき


よこがき

ジ	ヤ	ム

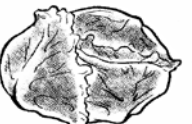
短文づくりをしたりして遊んだ。(図⑧)ねじれた音(拗音)の学習も、同じように進めた。(図⑨)拗音は、長音と組み合わせて、拗長音として使われる単語のほ数が多し。「シヤツ」では、「シ」と「ツ」の書き分けの復習ができた。

ながい音は □ をつけて


長い音(長音)のカタカナ表記だけは、ひらがな表記と




シヤツ



キヤベツ



ジャンケン



キャンブ

違っている。

ひらがなの長音表記では、ア、イ、ウ段はそれぞれの段の文字に、母音の **あ**、**い**、**う** をそえる。エ段の長音は、**い** を、才段の長音は **う** をそえて二文字で表記する原則になっているが、ウ段と才段には、めんどろな例外もあつて、なかなかむずかしい。でも、カタカナの長音表記は文字の代わりにはすべて **□** で書き表すことができる。(図⑩) しかも特別な例外もなく、すつきりしている。子どもたちが、それを知ったときは、「カタカナは、かんたん、かんたん」と大喜びをしたのだつた。

カタカナの長音表記のときもそれぞれの段ごとにひらがなの長音表記を復習しながら進めた。これまで、ひらがなで表していた「さあかす」

「たあびん」「きい」「し」
 いる「かぬう」などの
 外来語は、ここで、「サ
 |カス」「タービン」「キ
 |」「シール」「カヌー」



		ケ	
		ー	
		キ	


たてがき

よこがき


ケ	ー	キ

⑩


ボート




チーター



パトカー



カレンダー



のように、カタカナ表記にきりかえることを子どもたちと約束した。

いろいろな音の組み合わせ

次の段階は、ジュース、シュークリーム、チューインガムのような拗長音の入った単語や、チョッキ、ジャッキ、リュックサックのような拗音と促音と組み合わせでできた単語をとりあげた。これらのひらがな表記は、すでに学んでいるので、確実にできていればそのまま、カタカナに置き換えればいい。もし、不十分であれば、

この段階でもひらがな表記の復習をしながら進めるようにしたい。(図⑪)

⑪

チョーク	パラシュート	チューリップ	リュックサック
------	--------	--------	---------

たてがき

よこがき

日本語にない特別な音

外来語のなかには、ファール、フィルム、ジェットコースターなどのように、日本語にない特別な音をカタカナで表記している単語がある。(図⑫)

子どもたちには、外国からきたことばには、日本語にない特別な音があつて、カタカナで特別な書き方をする事を説明した。子どもたちに音声学的な学習が積み重ねられていると、外国語の発音に非常に興味を持つてくるようだ。

⑫

ロープ	パフェ	スパゲッティ	ティッシュペーパー
-----	-----	--------	-----------

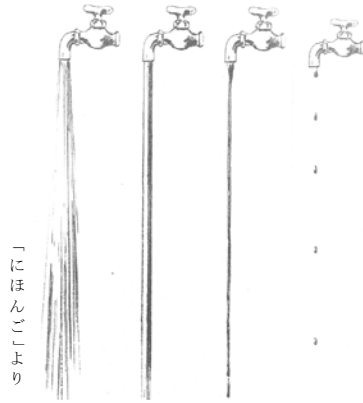
もののようにすや音をあらわすカタカナ

すべてではないが、擬態語や擬音語をカタカナで書き表すことも多い。

音や鳴き声集めをしたり、ドアをノックしたり、太鼓をたたいたりしながら、その音を聞いて、カタカナで書いてみた。水道の水などは場面によってさまざまな音を出して

おなじみずでも
 だすおとはいろいろだ。
 あめやうみやたきやおがわのおとを
 おもいだしてごらん。
 かみなりやかぜのおとも。

図 13



「にほんご」より

いるので、それを聞き分けるのも楽しかった。(図 13)。実際には音はしないけれども、ものの動きや様子、情景をイメージしながら短い文で作文スケッチなどもしてみた。擬態語や擬音語には、濁音、拗音や拗長音をつかうことが多い。子どもたちが見つけたことばを組み合わせると、これも調子のいい短い文ができあがった。(図 14)

おわりに

かな文字の学習は、学校に入学してきた子どもたちが一年生で学ぶ内容になっている。日本語の読み書きは、子どもたちの一生の財産になるはずだと思うのだが、教室ではどれだけ系統的で丁寧

に教えられるのだろうか。子どもたちの手にする教科書を見てみると、例えば光村図書「一の上」で最初に出てくる文字が「おはよう」である。短音と長音表記を同時に提出している。「よう」「ヨオ」と発音するから、初めて文字を学ぶ子は「う」を「オ」と読むと思いきや、初めは「う」で、何度か一年生を担任した教師は、教科書どおりの指導では期待したとおりに読み書きの力がつかないことを経験的に感じていたので、それなりの工夫をして教えている。でも、初めて一年生をもつ担任はまず教科書と指導書に即して丁寧に指導しようとするだろう。教科書の順序で授業をすればするほど、子どもたちの頭の中を雑多な知識で満たしはしても、順序だててものごとを考えようとする子どもは育たない。教科書はむしろ考える頭を混乱させるような単元配列にさえなっているのではないかと私は思っている。

入学してきた子どもたちに日本語の確かな力を育てたい。そんな願いから研究者や先輩たちから教わりながら実践してきた私なりの仕事をまとめてみた。

授業は生きていくから、報告の内容どおりに、直線的に進むわけではなく、どちらかといえばあちこち回り道しながらジグザグに進んでいく。時には全く混乱のまま停滞してしまふ。たまたまの偶然が、思いがけない展開を生むこともある。そんな実践を報告するのもおもしろいのだが、その報告では、紙面も限られているので読むほうは混乱してしまふそうだ。できるだけ「かな文字指導」の全体像と、

すずめ チュンチュン
 からすが カーカー
 にわで うぐいす ホーホケキョ
 かみなり ゴロゴロ あめ ザーザー
 かぜは ビュービュー あまど ガタガタ
 ピカピカ ピカッと ひかったら、
 ドカーンと かみなり おちてきた

図 14

おさえておきたい原則的なことがらが見えるようにまとめ
てみたので、寄り道をはぶいた報告になってしまった。も
し、この記録をもとに学級で授業をすることがあっても、
思うように進まないことにいらいらしいでほしい。その
ほうが子どもの自然の状態なのである。

授業が混乱していても、担任の側に、教材の体系が理解
されていて、授業のねらいが明確であると、何が混乱の原
因か見えてくることがある。また、混沌とした授業の中か
ら生まれた子どもたちの思いがけない発言や発想がヒント
になって、授業を立て直すこともできる。

計画どおりにならないのが授業で、瞬時に子どもたちと
の対応ができる柔軟さは、決定的に教材研究の深さによる
と、授業をするたびに私は思わされた。

授業でいつも心がけていたことは、授業の内容を子ども
たちの好奇心や探求心を働かせながら学びとっていきけるよ
うにしたいということである。一時間で学んだことが次の
授業で学ぶことの土台となる。授業を重ねるごとに子ども
たちの考えが深まるように全体の授業を準備しようと努力
してきた。ひらがなの表記の原則を学ぶことをとおして、
子どもが考える人として育つこと。それが授業ではないか
と思うのである。

一年生の初めの頃は、進度がおくれ、単元どおりに進ま
ないことが多かったが、確かな力をつけていけば、後半に
なると学習はいつきに進むという確信も持つことができた。

いま、私たちが使っている日本語は、地球上にあるたく
さんの言語のひとつだが、共通していることは、人は言語
をもつことによって考える人になったということである。
他の国々の人々との交わりを豊かにするためにも、子ども
たちに母国語としての日本語を豊かに学べるようにしてや
りたい。子どもたちに確かな力をつけるために教師の実践
が豊かにならなければならないと思う。この報告が教室のしごと
に少しでも役に立つのであればうれしい。

参考にした主な文献

- 「小学1年生における文字指導について」 (「国語教育の理論」奥田靖雄・麦書房)
- 「かな文字の教え方」(須田清著・麦書房)
- 「かな文字指導の原則」(佐久間妙子・教育国語412・むぎ書房)
- 「一年生の「つぽんご上」にもとづいて」(大槻浩子・教育国語413)
- 「かな文字指導の段階」(菅原厚子・教育国語415)
- 「「つぽんご1 もじのほん」(明星学園・国語部著・麦書房)
- 「一年生の「つぽんご上・下」(教科研・国語部会編・むぎ書房)
- 「「つぽんご5・発音とローマ字」(教科研・秋田部会・麦書房)
- 「「ほんごだいすき」(むぎ書房)
- 「ほるぶ教育体系「こくごだいすき」(高橋太郎他・三省堂)
- 「「ほんご」(谷川俊太郎他・福音館書店)
- 「「きょうはなんの字やるのかな」(全群馬教職員組合研究所)